# 特集 はこまち対談

Part 14

## 商店街とともに、 夢をひろげたい

### 能登 正勝（のと まさかつ）氏　現在 33 歳

〈PROFILE〉

精神障害者保健福祉手帳２級　境界性人格障害・気分障害（うつ病）
05 年 4 月に、精神保健福祉の現状を危惧し、当事者活動の必要性を訴え続ける。同時に当事者団体にも参加、当事者活動を続け、平成 19 年 1 月、ＮＰＯ法人日本障害者・高齢者生活支援機構の理事長就任、当事者側の委員として、岩手県精神保健福祉審議会 委員に就任、平成 19 年には世界 120 国が参加する。ＮＧＯ組織のＤＰＩ北海道ブロック理事に就任し、地域のコミニュティ作りをテーマに講演活動をし、精神障がいだけではなく、身体・知的障がいも含めた障がい者活動の場を広げている。また、平成 22 年 6 月より中島町商店街振興組合専務理事に就任し障がい福祉だけではなく、商店街活動にも力を発揮している。

### 島 信 一朗（しま しんいちろう）氏　現在 41 歳

〈PROFILE〉

身体障害者（全盲）
社団法人函館市身体障害者福祉団体連合会副会長、社団法人函館視覚障害者福祉協議会理事長、函館市障害者基本計画策定推進委員会委員、国立函館視力障害センター非常勤講師、北海道運輸局バリアフリーリーダーインクルーシブ友の会代表、北海道ＣＢ・ＳＢコーディネーター、北海道ユニバーサル上映映画祭実行委員会代表、ユニバーサルスポーツフェスタ実行委員会代表、函館大谷短期大学非常勤講師、中島れんばい横丁開催運営実行委員会代表

---

**今回は、 中島廉売の中にオープンした、中島れんばいふれあいセンターの活動について、 理事長の能登さんと、 支援者の島さんにお話をお聞きしました。**

丸藤：ふれあいセンターのオープン、おめでとうございます。

能登：ありがとうございます。平成２２年12月２０日にオープンしました。ＮＰＯ法人の事務所と就労継続支援Ｂ型の事業所の他、定期的に“れんばい横丁”を開催していきますし、全国的にも珍しいのですが地元の商店街振興組合の事務所も入ってます。

丸藤：なぜ中島廉売の中で活動しているのですか？

能登：前は石川町に事務所を置き障がい者の相談を受ける活動をしていたのですが、とても不便でした。障がい者支援は、公共交通機関が充実している所で行わなければ出来ません。青森に、SANNet 青森という精神障がい者を支援する団体があって、商店街の中で共に活動しています。私達も、そういう所がないかなと探している中で中島廉売との出会いがあり、僕らが商店街の活性化を手伝いますよということで皆さんにもご理解いただき、平成２０年１１月に引っ越してきたんです。

丸藤：活動を始めたきっかけは？

能登：私自身が精神障がいの当事者なのですが、函館に来た時に、障がいを理由にアパー

トを借りられなかったりしました。それで、当事者として活動していかなければだめだと思い、今に至ってます。

島　：能登さんとの出会いは平成１７年からですが、当初から志がありました。実は負けず嫌いで、エネルギーがあり、沢山の支援者ができている。それが形になったのが、このふれあいセンターです。そういう能登さんの直向きに志すものを感じて、体重は重たいけど支えなきゃなと。（笑）

丸藤：オープニングセレモニーには、多くの方が参列していましたね。

能登：本当に嬉しかったです。「お金を払って来てもらうことはたやすいけど、逆にお金を使わして来てくれるって、あんた感謝しなきゃだめよ」と、ある人に言われました（笑）

丸藤：毎月第４金土に行っているれんばい横丁も、今度からはふれあいセンターが会場ですね。

能登：中島廉売には食べるところが無いよね、という声がありました。それと、僕の障がいは目に見えなくて、説明することがとても難しい。ならば違う形で、どうしたら分かってくれるだろうかという時に、みんなでお茶を飲んだりご飯を食べたりお酒を飲んだりして、夢を語ったりお互いの話をする。そういう場をつくろうと。そうすれば、自分たち、当事者の活動も広がるんじゃないかと思いました。毎日は無理だけど、月に２日間ならできるし、食べ物やさんもできるし、商店街に人も呼べるからいいよねと。

丸藤：平成２２年の１２月で２５回目ですね。

能登：最初は、後片付けもほとんど１人でやっていました。でも、昨年、ＤＰＩという全国の障がい者の集まりが函館であったとき、色んな方が来てくれて、これは良いと言ってくれました。色んな障がいをもった人が集まっている。地域のおじさん、おばさん、子ども達、お年寄りもいる。楽しみに来てくれるファンの方もできました。これが切掛けで商店街に来る若い子連れの夫婦なども増えたんですよ。

島　：私は最初に来た時に褒めちゃったため、引きずり込まれ実行委員会の代表になってしまったんです。だから、もう褒めないようにしている。（笑）

丸藤：なぜ褒めちゃったんですか？（笑）

島　：それはね、空気が凄かったです。自然なんですよ。見えない自分がいて、聞こえない人がいて、車いすの人もいるし。それが自然になってる。となりのテーブルの人ともすぐ友達になれちゃう近さ。お年寄りがいて、お母さんが美味しいもの食べてて、走り回っている子どもを見ず知らずの大人が面倒見てる。障がい者、健常者、年齢性別、全ての人達がいるという空間を、私は感じたことがなかった。それで、「たいしたものだなあ！」と言ってしまったんですよね。（笑）

丸藤：私も行った時に感じたのですが、あの空間を経験した子どもとそうでない子なら、ずいぶん育ち方も違ってくるように思います。とても良い経験の場所です。

能登：障がいを持った人と接する機会って、日本の教育では残念ながら少ないですからね。

島　：障がい者と一緒に何かしていくことが、当たり前になっちゃいます。

能登：中島廉売に来ると障がい者が働く姿も見られて、物を買う時お金が回る。こういった地域はあまりないと思います。

丸藤：この先の計画や想いを教えてください。

能登：れんばい横丁は、出店数や企画も増やしたいです。ただ、無理はしないで、手作りで優しさ温かさを持って毎月やっていきたい。障がい者は、施設から地域へと言われています。ここをベースに色んな方が新規の事業を始め、それが商店街に来る切掛けになったり、障がい者の雇用につなげていく場所にしていきたいですね。

島　：教育とか福祉とか、そういう地域力や資源というのはまだまだつながりが薄いので、ネットワークを作るための拠点になればいいなと期待しています。

能登：親方は、注文うるさいんですよね（笑）

丸藤：まちづくりセンターも、応援していきたいと思います。

島　：滞在力のある良い地域なので、夢が広がりますね。

＜聞き手＞
函館市地域交流まちづくりセンター
センター長　　丸藤　競